地下歌人の古今集研究

――『古今連著抄』をめぐって――

西田正宏

はじめに

中世以降の歌人にとって、『古今集』が最も重要な歌集であったことは、言うまでもないことだろう。「古今伝受」という営みを今さらながらしく取り上げるまでもなく、それは認められることと思われる。

事情は近世に至っても、そう変わることはなく、堂上においては脈々と古今伝受の系譜が保持され、一方「古今伝受の人」[1]とは一線を画しながらも、地下歌人たちによる『古今集』研究も続けられていた。例えば、北村季吟には、『古今集教端抄』（『古今拾穂抄』）があり、河瀬菅雄には『古今見聞抄』がある。ともにさまざまな『古今集』の注釈書を博捜し、師説や自説を加える「諸注集成」型の注釈書である。地下歌人に含めてよいかどうかの判断は難しいけれども、現代の研究においても評価の高い契沖の『古今余材抄』もここに加えておいてよいのかもしれない。[2]

かつて拙著において、松永貞徳の『古今集伝授鈔』を取り上げ、地下歌人の古今集研究の始発のありようを見定め、また望月長孝の『古今仰恋』の分析を通して、地下歌人の古今集研究の実際について考察した。けれども、貞徳からはじまるいわゆる「地下の一流」[3]と称される人々の『古今集』の注釈については、すでに先学にも指摘があるように、長孝の『古今仰恋』以外は、注釈書としてまとめられたものは伝来していないごとくである。[4]本稿では、そのあたりの状況を確認しつつ、あらためて望月長孝以降の「地下の

一流」の古今集研究について検討することにしたい。

一、『古今仰恋』の伝来と方法

すでに拙著で論じたことであるが、この流派の古今集研究のありようを検討するために、まず望月長孝の『古今仰恋』の伝来と方法について確認しておきたい。伝本は、「国会図書館本」、「京都大学文学部閲覧室本」と国会本・京大本の頭注などが、基本的に本文の後ろに記されている「三井家旧蔵カリフォルニア大学バークレー校本」の三本が知られている。注釈の内容に大きな差はない。他の多くのものがそうであるように、本来ならば、長孝の伝書は平間長雅、有賀長伯へと継承されるのが常であった。しかし、『古今仰恋』は、その奥書によれば、唯元法師一派に伝えられた。上野洋三氏は、その一連の動きについて、

とにかく元禄九年正月廿日、粟田山荘に隠棲して（神宮文庫蔵『平間長雅和歌集』による）以後晩年を各地に隠者然として送る長雅からは想像もつかないナマ臭い事件が長孝の死をめぐって惹き起こされたことだけは推測される。

と、唯元法師一派と長雅との間に「ナマ臭い事件」があったことを想定している。[5] これは次に挙げる長伯の『以敬斎聞書』[6]の記事に基づくと思われる。

長孝の古今の抄といふあり。是は、秘訣口伝をあらはすにあらず。長孝の門人の中に十人餘り人数を撰び、願によりて、たゞ哥面を講ぜられし時の抄也。古今の雑談抄也。此抄、長孝身まかり玉ひし比、長雅、喪にこもり居玉ひけるが、長孝の墓にまふで玉ひける跡にて、孝師の親族など、心を合て、彼是とりのけし跡に書ありけり。其中に雑談抄もありしと也。其後、門人とりかへしてんといきどをり侍りしかど、雅師の制し玉ひけるとなん。此雑談の抄、今、大坂の民家にあるよし、風聞ありとなん、師の語り玉ひし。

私云、是は、長伯師の、まだいと若くて長孝の門人と也玉ひて、無程、孝師、身まかり玉ひける事なれば、雅翁の物語にて聞しと語り玉ひし。【長孝の古今の抄といふ物ある事】

「たゞ哥面を講ぜられし時の抄」という物言いなど、結果的に手元に伝わらなかった者の証言であるので、その点は差し引いて考える必要はあるけれども、長孝の『古今集』

の注釈書が、彼を師といただく長雅・長伯周辺には伝来しなかったことをここでは確認しておきたい。

『古今仰恋』は、まず「宗祇云」という形で『両度聞書』を引用した後、「師談」として、長孝説が展開される。「師談」の部分は、その叙述から、全て長孝自説のように見え、先行する注釈書を引用していることは、ごく一部の注釈書（『顕注密勘』など）を除いて、明らかにされない。けれども先行するさまざまな注釈書と対比してゆくと、肖柏の『古聞』と『古今栄雅抄』を利用していることが確認される。その具体については、すでに拙著において、多くの例を引いて検討したので省略に従うが、本稿において改めて注目しておきたいのは、注釈の基盤に『両度聞書』が使われていることと、その注釈を補うかたちで『古聞』が利用されている点である。

二、『古今連著抄』をめぐって

さて、一で確認したように、長雅・長伯周辺には長孝伝来の『古今集』の注釈書やそれを承けての彼ら自身の手になる注釈書は存在しないようである。しかし、もう少し視野を拡げて、何らかの『古今集』注釈書の書写や、その収集に関わった可能性について考えてみるならば、いま少し検討するべき問題があるように思われる。(7) 一で見たように長孝は『両度聞書』を自らの注釈の基盤に据えていたが、長雅や長伯が『両度聞書』を書写した形跡はないであろうか。そのような視点から彼らの注釈の営みを捉えなおしてみたい。

例えば大阪府立中之島図書館に蔵せられている『古今連著抄』は、宗祇の『両度聞書』に多くの書き込みが施された注釈書である。それぞれの冊の末尾に「墨附＊＊枚」とあり、「良淳」（＝長雅）の鼎印が押されている。よってこの注釈書は何らかのかたちで平間長雅の関わったものであると認められる。ただし書写者の筆跡が長雅のものであるかどうかは、定かではない。

筆跡はともかく、この書き込まれた注釈は、長雅によるものかと思われるのであるが、実は、そうではない。結論から言えば、この書き込みは宗祇門弟の宗碩と肖柏によるものなのである。つまり、この『古今連著抄』は『古今十口抄』（以下『十口抄』と略す）と基本的には同じ内容の注釈書であり、『十口抄』の伝本の一つであるとみなされ

るのである。すでに『古今集注釈書伝本書目』[8]においても、このことは認識されており、『古今連著抄』を索引で引けば、『十口抄』とあり、『十口抄』の項目に「外題　古今連著抄」として掲出されているのであった。

それでは、『十口抄』とは、どのような注釈書であるのか。『古今連著抄』と題する伝本の問題は後述することにして、まず『十口抄』について検討しておくことにしたい。

『十口抄』は、北村季吟の『古今集教端抄』にしばしば引用されており、注目されてきたが、その注釈の内容について、ほとんどはじめて言及されたのは、片桐洋一氏であった。片桐氏は『中世古今集注釈書解題三　上』[9]の「Ⅳ　東常縁から宗祇へ」のなかで、『十口抄』に付された奥書を読み解きつつ、

宗碩の「十口抄」は、奥書を見ただけで、宗祇の「両度聞書」に肖柏の「古聞」の本文を書き入れたということがわかる。

とされた。この章における片桐氏の関心は専ら『両度聞書』の成立と本文にあり、以降の記述も『十口抄』の引用する『両度聞書』の本文の問題に及ぶため、『十口抄』の内容については、それほど詳しく述べられない。また片桐氏の執筆にかかる『和歌大辞典』[10]においては、

宗碩が文亀元年六月九月まで、越後において師匠宗祇の古今集講釈を聞き書きしたうえで、のちに肖柏の宗祇説聞書である『古聞』と照合して不審の点などを整えたものである。

と宗碩の関わりについて一歩踏み込んで指摘された。が、辞典のことゆえ、具体の例を示されたわけではなかった。

この解題を承けつつも、内容について、さらに詳細に分析されたのは、平澤五郎氏であった。平澤氏は、「慶應義塾図書館蔵　宗碩自筆「古今和歌集聞書」」を紹介された、その解題において、伝本調査が十分でないということで留保されつつも、『十口抄』について、次のように述べられた[11]。

管見する限りに於いては、「両度聞書」を本文に立て、同系統の複数聞書を傍注し増抄、補説する形態をとるものである。

さらに平澤氏は、『十口抄』の識語中の「秋田城之介殿宗実所持」本が「但宗実御本以朱黄点行傍別説々」と記していることに注目され、まさにこの「朱黄」を区別して付している伝本として、今回、本稿が取り上げる『古今連著抄』

について言及されるのである。九〇四番歌を例に、その書き込まれた注釈について検討され、朱点の施された注釈が、「慶應義塾図書館蔵　宗碩自筆「古今和歌集聞書」」（以下、「宗碩注」とする）と一致すること、また黄点を施された部分が、肖柏の『古聞』に一致することを指摘された。そのうえで、改めて『十口抄』の性格を次のようにまとめられた。

その源泉たる「両度聞書」を基底におき、その土台の上に、宗祇講授、就中連歌師系流伝受の聞書を代表する肖柏・宗碩の両聞書を以って補強し、連歌師系流の宗祇講釈を集成化、あるいは完成化を目論んだ、その結果と見ることが出来ようかと思われるのである。

『十口抄』またその伝本の一つである『古今連著抄』の性格については、平澤氏の解題にほぼ言い尽くされているといってよい。今さら屋上屋を付すのも気が引けるが、念のため、その注釈の状況を改めて確認しておこう。[12] なお、行間に書き込まれた注釈は、【書き込み傍注】として後ろに掲出した。

夏虫をなにかいひけん心から我も思ひに燃えぬべら也

（恋二・六〇〇、題しらず・躬恒）

何かいひけんとは、もどきおもひしよし也。身をこがすほどとは、何しかなどおもひし義也。

【書き込み傍注】

（「もどきおもひし」の右に）蛍をなにしに

我もおなじやうにもえぬべしと也。夏虫をはかなき、何故に身をこがす斗思らんなど、もどく様に思ひしが、我思、切に成ぬる時は、又如此なれば、何かいひけんと也。

それぞれに対照しておこう。まず本文として引かれている『両度聞書』[13]は、

何かいひけんとは、もどき思ひしよし也。身をこがすほどはなにしにかなどおもひし義也。

とあり、ほぼ一致している。また、「宗碩注」には、

何かいひけんとは、蛍をなにしにもどき思へる、我も同やうにもえぬべしと也。身をこがす程はなにしになと思し義也。

とあり、本文の「もどきおもひし」の右に「蛍をなにしに」と書き込まれていたのは、この「宗碩注」によるものであり、またそれに続く「我もおなじやうにもえぬべしと也」という注釈も一致していることが確認できる。この文言が

入ることにより『両度聞書』を読むだけでは唐突に感じられた「身をこがす」という部分へのつながりがわかりやすくなる。また後半は、『古聞』に、

何かいひけんとは、夏虫をはかなや、何故に身をこがすばかり思ふらんなど、もどく様に思ひしか、我思切に成ぬる時は、又かくのごとくなれば何か云けんと読り。

とあるのと一致する。平澤氏の指摘の通り、この場合は、前半部が「宗碩注」、後半部が肖柏の『古聞』を引用していることが認められよう。

したがって、すでに指摘されていることだが、『古今連著抄』は、『十口抄』の伝本の一つということになる。それだけであれば、本稿はその点を改めて確認したにすぎない。しかし、『古今連著抄』の伝本のなかには、それだけにはとどまらない、独自の書き込みをもつものが存在する。次節以降では伝本の状況をふまえ、『古今連著抄』の注釈史上における意義について考えることにしたい。

三、『古今連著抄』の伝本

いま『古今連著抄』と題される伝本は、先に取り上げた大阪府立中之島図書館蔵本以外に二本知られている。ノートルダム清心女子大学本については未調査であるが、宮内庁書陵部に蔵されているものには、中之島本には見られない次のような文言（識語）が、表紙見返しに記されている。

此鈔物全十冊仍雅翁旨談長伯老改正之　氏朝（印「平印／氏朝」）

また、それぞれの冊末に「墨附＊＊枚」とあり、「長雅」の陰刻印が押されているのである。表紙見返しに記された識語からは、この書陵部本が、雅翁（長雅）が『古今集』について講釈（談）したことを長伯が改正を加えたということを氏朝（北条氏朝）が認定したものであるということが読み取れる。先にも述べたように本文自体への書き込みの多くは長雅や長伯のものではないので、このこと自体は、必ずしも正しい認識とは言えないかもしれないが、氏朝周辺には、他にも類似の識語を有するものが、複数存在するようである。

日下氏著「北条氏朝年譜」享保十七年のところには、次のようにある。

なおその他、宮書本氏朝書写本（年代不明）にA『耕雲口伝』一冊、B『古今集註』五冊、C『源氏物語系図』一冊、D『後鳥羽院之御書』一冊、E『古今集真名序聞書』一冊などがある。（中略）Bは四冊目までは顕昭古今集註、五冊目は顕注密勘。四奥に、

此抄全五冊、長雅翁時談、長伯翁改正之。氏朝

とある。（中略）Eの扉裏に、

此抄依雅翁旨、談長伯老、改正之。　氏朝（方印「平姓氏朝」）

とあり、巻末に

墨付七拾乙枚（方印「長雅」）

とある。模写本か、誤写多し。

このように『古今連著抄』と同様に氏朝が関与した写本が存在していたことが複数確認できるのである。日下氏が「模写本か、誤写多し」とされるように、氏朝の書写本ではないが、識語から、氏朝の関与は認めておいてもよいだろう。その識語の類似から、この一連のものとして、書陵部本『古今連著抄』も位置付けられよう。そして書陵部本『古今連著抄』には、本文への書き込みとは異なる書き込み（朱書き、片仮名書きが多い）も見受けられるのである。

そしてさらに、この見返しに示された識語と本文への書き込みの存在の関連を考えると、書陵部本『古今連著抄』の本の様相は、東大本「函底抄」（『古今素伝懐中抄』）とすこぶる類似していることが確認される。[14] 東大本「函底抄」（『古今素伝懐中抄』）にも、

遣鈔物　全二冊仍雅翁者談長伯老改正之　氏朝

と、表紙裏に記されている。ただし東大本には、「氏朝」の印はない。この東大本「函底抄」（『古今素伝懐中抄』）にも、書き込みがあり、それは長雅、長伯、氏朝によるものであることが指摘されている。[15]

また、日下氏著「北条氏朝年譜」宝永五年のところに「『古今伝授』（『日記』）」とあり、この時が平間長雅による古今集講釈の始まりであったと推量される。加えて長雅の講釈の内容についても次のように推定されている。

なお長孝の古今集講釈については長孝自身による『古今集両度聞書』書き入れ注や『古今仰恋』という形で残されているから、その内容も概ね明らかであるが、長雅の講釈については一書になっていないようである

から、その内容については不明である。しかし伝授という現象の属性からして、『両度聞書』や長孝の講釈を基にしたものかと思われる。

この推定を裏付ける証拠の一つとして『古今連著抄』の存在が考えられないだろうか。なお附言すれば、日下氏は、大阪府立中之島図書館蔵『古今和歌集両度聞書（内題）』（住友家旧蔵書）の書き込み（片仮名）は、望月長孝の自筆で、『仰恋』との関連を示唆される。重要な指摘であるけれども、注釈の内容も『仰恋』に比して少なく、『仰恋』と部分的な一致を見るものもあるが、関係についてはいま少し精査する必要があるかと思われる。

しかし、いずれにしても『両度聞書』をテキストに、彼らの古今集講釈はなされたのであって、『古今仰恋』をまとめた長孝とまとまった注釈は持たなかった長雅、長伯、氏朝らとに変わるところはない。

長雅や長伯、さらに氏朝たちは『両度聞書』を書写し、さらにその理解を補うために、同じように宗祇から講釈を受けた『宗碩注』と『古聞』を書き込み、さらに、それらの注釈についてのコメントを付すというかたちで、『古今集』の研究を続けていたのであろう。

四、書陵部本『古今連著抄』の書き込みについて

では、続いて書陵部本『古今連著抄』にのみ見られる「書き込み」についてみておくことにしたい。ある性格が導けるほどの分量ではないが、どのようなことに関心を抱いていたのかの参考くらいにはなると思われる。

まず注意したいのは、九二番歌の頭注として付された、

黄朱ノテン、何ノワカチニヤ、フシン。追考、連著ユヘ、二人ノテンカ。

という注記と、四四七番歌の頭注として付された

黄朱テンドモ、所々名入所アリ。

という注記である。すでに平澤氏の解題でも述べられ、本稿でも例を挙げて確認したように、この「黄朱」の区別はその注釈者によるものであって、書陵部本『古今連著抄』のこの書き込みを施したものには、そのことが理解されていなかったということになろう。四四七番歌の「所々名入所アリ」というのは、名前の区別が書き込まれていたところがあると読めるが、四四七番の周辺を含め、そのような

ところはなく、理解に苦しむ注記である。

二番歌には、

此声ノサシヤウ、頭ニサスト、字ノ半ニト下ニサストニテ、上声平声去声ノ別チアルト也。韻キヤウヲ知ザレバ難二心得一。コノ書写物ニハ点ノサシ所モ多ハチガヒタルベシ。

とあり、声点を問題としている。確かに書陵部本には、声点らしきものが見受けられるが、そのことへ理解の不十分さを断っているのであろうか。また四七九番歌には、

素伝モ下野守カ。東下野守常縁ハ法名素暁也。素純ハ中院也。

とある。人物に関する一見、理解不能の注記は、行間に書き込まれた『古聞』が「下野入道素伝料簡説」を引用していることによるものである。

右に挙げたのは、基本的に歌の理解そのものにはかかわらない注記で、この三つ程度である。やはり多くは、歌の解釈にかかわることが記されている。

例えば、「やま田守秋のかりほにをく露はいなおほせ鳥の涙也けり」（秋・三〇六）には、頭注として、

栄雅抄ニ、家隆ハ鴫トイヘリ。稲負と云ニヨレルカ。トウトイフ鳥ナニ鳥ノコトカ。

と注記される。『古今栄雅抄』の三〇六番の注釈には、このような注はなく、同じ「いなおほせ鳥」の詠まれる二〇八番歌の注がここに引かれているのである。ここでは本文の『両度聞書』、書き込みの『古聞』ともにこの鳥が何であるかは話題にしておらず、ここにわざわざ『古今栄雅抄』の別の歌の注釈（二〇八番歌）を書き込むのは、やや的外れな感がある。が、それはそれとして、この流派における『古今集』注釈への関心を忖度すれば、わずか一例とはいえ『古今栄雅抄』が引用されている意味は決して小さくはない。というのは、長孝の『古今仰恋』は『古聞』と『古今栄雅抄』を巧みに利用することで、自説を形成していたからである。その基本的な方針が、門流にも確実に受け継がれている証左の一つと見ておきたい。

他の例も見ておこう。短い注記が多いなかで「龍田川紅葉ばながる神なびの三むろの山に時雨ふるらし」（秋・二八四、題しらず・よみ人しらず）には、次のような注記が施されている。

家隆ノ心ハ、落葉ナラバ嵐吹ラシニテアルベシトノ心歟。定家ノ心ハ紅葉乱レテニ嵐ハコモレリ。コノナガ

ル、紅葉ノ色コキヲミテ、ミムロノシグレヲ思ヒヤリタル也。格別ノ意味也。小書ノ注ハイカヾ。

この部分だけを見れば、家隆説と定家説が対比されているのは、唐突のことのようにに思われるが、傍らに書き込みされている『古聞』に、

家隆は嵐吹らしとはなかりけんと云々。定家卿は此義うたてく思給へり云々。時雨降らじとあれば、こし方時雨きぬるより、今も思やれる心箱て大様に面白。已上二首の子細、序相伝時可聞也云々。左注又飛鳥川紅葉ば流る、万葉に有とぞ。そばに付たる不用也。此哥人丸哥注せず云々。され共人丸哥也と云。定家卿注也。

とあり、その注を改めて理解するための書き込みであったことが知られるのである。末尾の「小書ノ注ハイカヾ」というのは、『古今連著抄』本文の左注の下にに「小書」で「此哥不注人丸哥」とあり、そのことに疑問を呈しているのであろう。

以上、書陵部本『古今連著抄』に施された、傍注とは違う書き込みについて、代表的なものを挙げて検討してきた。先にも述べたように何かしらの特徴を抽出できるような分量ではないが、敢えてまとめるならば、次の二点が指摘できようか。

一つは、それらの注記が書き込まれた注の注釈的な役割を担っているということ。結果的に歌の解釈に向かうこともあるけれども、書き込まれた注を理解することに重きが置かれているように見受けられる。

もう一つはやはりこの書き込みを施したものも、いわゆる「地下の一流」に連なるものであるらしいこと。歌をよく心得たものであるかどうかという疑問はあるが、たまたま引用は一か所にとどまっているが、『古今栄雅抄』も参考にしている点は先述したように意味のあることだと思われる。

五、地下歌人の古今集研究

本稿で検討してきた、「良淳」（＝長雅）の鼎印が押された、中之島本『古今連著抄』は、同じ中之島図書館にある「古今集諸抄」として一括された古今集注釈書群のうち、『飛鳥井家伝来抄』と同じ装丁をもつ。またこれらの一群のなかには『十口抄』も存在している。この注釈書群が「平間長雅筆」（目録カードに記載）とされることからも、

筆跡についての判定は難しいが、長雅が関わったことが想定される。

この書写活動をもっと積極的に評価するならば、この「古今集諸抄」として一括された古今集注釈書群の書写活動は、長孝、長雅を中心とする、いわゆる地下一流の歌人たちの古今集研究の成果の集成であると考えられる。

すでに日下氏の著書に指摘されていることではあるけれども、彼らの流派に関わり、多くの伝書を伝授された森本宗範の『古今集』の注釈書である『古今和歌集類解』（二五巻、東大寺図書館蔵）は、その量からも推察されるようにまさに諸注を集成した注釈書であるが、そこに引用された古今集注釈書は、この「古今集諸抄」として一括された古今集注釈書群とほぼ重なるのである。またこれらの注釈書群のうち、『顕注密勘』や『了誉序註』などは版本として出版されている。例えば、そのなかの『了誉序註』は版本とはやや異なる本文を有しており、単なる版本の写しというわけではない。本文のさらなる検討が必要だが、むしろ『古今集』注釈書の出版の背景に、多くの注釈書の書写に関与したと思われる地下歌人たちの存在があったのではないかと推量されるのである。(16)

さらに推量を重ねるならば、これらの注釈書のうち、宗祇の末流のものたちによってまとめられたとされる、例えば、『宗祇略抄』などは、こういうかたちで宗祇のものをまとめるという営みもふくめて、長雅の門流たちで行われた営みだとは考えられないだろうか。本稿で取り上げた『古今連著抄』（＝『十口抄』）は宗碩がまとめたものであると考えられてきたが、その点については、すでに平澤氏が解題で、

本解題は、その編者を通説に従い拙述しているが、しかし猶、一抹の不安と躊いを覚えるのである。

とし、また識語に「編者その人の然るべき追記、付言が存」していないことにも不審を抱いている。また、武井和人氏も、『和歌文学大辞典』(17)において、

ただし、編者を宗碩とするのは一つの見方であって、必ずしも確定しているわけではない。

と記された。確かに『十口抄』の編者に、必ずしも宗碩を想定する必要はないように思われる。むしろ、宗碩が『両度聞書』を書写し、肖柏の説（『古聞』）を書き込み、さらにそこに自身の説を書き込んだとするよりは、『両度聞書』の理解のために、その門弟たちの説を第三者が書き込んだ

と考える方が自然ではないだろうか。加えて『古今連著抄』という伝本の存在を考慮するならば、長雅をふくめた長雅門流の営みであった可能性も考えられるのではないかと思われるのである。

それは何も宗祇流の注釈書を捏造しようとするような営みではない。自分たちの理解のために、また『両度聞書』という注釈書の全き理解のために、そのような営みはなされたと思しい。

現存する長孝の『古今仰恋』は、テキストとして使用された『両度聞書』をまずはじめに引き、「師説」として長孝の講釈を分けて記載している。その長孝の講釈の主要なテキストの一つとして『古聞』が存在したわけで、そもそも長孝の手控えの段階では、『両度聞書』の傍注として、それは書き込まれていた可能性もあろう。そしてそこに師説として長孝の説も書き込まれていたとするならば、草稿段階では、『古今連著抄』のようなものにすこぶる近いものであったと推定することもできるのである。結果として、その聞き書きをまとめ、整理し、清書されたものが、長孝の『古今仰恋』であったとするならば、長雅たちの営みもまた、新たな注釈書を成立させる可能性を有していたと考えられるのである。

おわりに

以上、日下氏の驥尾に付して地下歌人の古今集研究について考えてきた。長孝以降の地下の一流には古今集研究の具体の注釈書が見いだせなかったことから、本稿では、長雅たちの注釈書（『両度聞書』）への「書写活動」「書き込み」などから窺える古今集研究について検討した。

成立が中世の注釈書は、当たり前のことであるけれども中世の注釈書として研究され、その書写についてはあまり問題にされてこなかったように思われる。書写奥書のないものも多く、だれが書写に関わったのか、不明なものも多い。しかし一方で、それらは近世に入ってから書写されたものが圧倒的に多く、以前から近世の注釈の問題としてもとらえるべきであると考えてきた。本稿は、そのささやかな試みでもある。

なお、本稿では、『十口抄』、およびその伝本の一つである『古今連著抄』の注釈と地下歌人たちの関わりを中心に述べたが、『十口抄』そのものの考察については、先学の

指摘に負うところが多かった。注釈の基本的な性格については、大きな誤りはないと思われるが、慎重に対比してゆけば、「宗碩注」と『古聞』だけでは覆いきれない注釈（その多くは点を持たない）もあり、それらは、長雅や長伯による可能性も考えられるのである。今のところ、そのことを考えるための、注釈の十分な検討ができておらず、その点については、今後の課題としたい。

注

（1）松永貞徳の物言い。『戴恩記』など貞徳の著作にしばしば窺われる。拙著『松永貞徳と門流の学芸の研究』（二〇〇六年二月、汲古書院）参照。なお本稿でいう「拙著」とはすべてこの書のことである。

（2）契沖の注釈書に「諸注集成」的な一面が見受けられることについては、注（1）の拙著や拙稿「添削の批語と注釈のことば―契沖の注釈の学芸史的意義―」（隔月刊『文学』二〇一六年、一・二月号、岩波書店）で言及したことがある。

（3）『近世畸人伝』（中野三敏校注、中公クラシックス）の「広沢長孝」のなかの記述。

（4）日下幸男氏『近世古今伝授史の研究　地下篇』（一九九八年一〇月、新典社）など。以下、本稿で「日下氏著」とするものはすべてこの書に拠る。

（5）上野洋三氏『元禄和歌史の基礎構築』（二〇〇三年一〇月、岩波書店）。

（6）引用は、国会図書館本に拠り、私意により句読点、濁点を付した。

（7）この点については、すでに拙著においても、いささか言及していたのであったが、その折はその重要性について、十分に認識していなかった。

（8）斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』（二〇〇七年二月、勉誠出版）

（9）片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題三　上』（一九八一年八月、赤尾照文堂）。

（10）引用は、『和歌大辞典』（一九八六年三月、明治書院）に拠る。

（11）「慶應義塾図書館蔵　宗碩自筆「古今和歌集聞書」」（『斯道文庫論集』第二十一輯、一九八四年）

（12）『古今連著抄』の引用は、中之島図書館本により、私意により句読点、濁点を付した。「宗碩注」は、前掲注（11）の翻刻、『古聞』は『斯道文庫論集』第二十二輯（一九八五年）に翻刻された前田育徳会尊経閣文庫蔵本に拠る。

（13）片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題三　下』（一九八一年

八月、赤尾照文堂）に翻刻された「近衛尚通本」に拠る。版本は本文が異なっている。なお『両度聞書』の版本の本文については、版本作成段階での、地下歌人などによる本文への関与も想定する必要があるかもしれない。今後の課題としたい。

（14）斯道文庫監修『古今素伝懐中抄』（二〇一〇年一〇月、勉誠出版）による。解題は浅田徹氏。

（15）ただし、『古今素伝懐中抄』の書き込みには、長雅や長伯の名前も窺え、量も書陵部本『古今連著抄』に比べ多い。

（16）地下歌人の出版への関与については、前掲の拙著および拙稿「偽書の出版」（隔月刊『文学』二〇一〇年五・六月号、岩波書店）でも考察を加えたことがある。

（17）引用は、『和歌文学大辞典』（二〇一四年一二月、古典ライブラリー）に拠る。

（付記）

本稿は、科学研究費による成果の一部である。

（大阪府立大学地域連携研究機構）